

37 言語習得と使用基盤モデル

ヒトは生得的に言語に特化した能力があり、それを利用して子どもは言語を獲得するという立場の**生得性仮説 (innateness hypothesis)**とは反対に、**使用基盤モデル (用法基盤モデル) (usage-based model)**はヒトにそのような言語専用の先天的能力はなく他の霊長類と一部共有している一般的な認知能力を用いて子どもは言語を習得するという立場である (Tomasello 2003)。

Tomasello (2003) によると、言語習得に必要な一般的な認知能力は主に2つある。1つは**意図理解能力 (intention-reading skills)**で、相手と同じ対象に注意を向ける力、相手の注意を導く力や相手の意図的な行為を模倣によって学習する力が含まれる。これによって子どもは言語の記号的な部分 (意味的な部分) を習得する。例えば模倣により定型的な表現を覚えたり、単語の指示対象や文の機能が要求なのか命令なのかなど理解できるようになる。この意図理解能力はヒト特有とされるが、言語コミュニケーションだけでなく礼儀や道具の使い方を習得するのにも使用されるため言語に特化していない領域一般的 (domain-general) とされる。

2つ目は**パターン発見能力 (pattern-finding skills)**である。この能力は知覚・概念カテゴリーを形成する力、スキーマを形成する能力、統計的な分布分析をする力、類似するものの間にアナロジーを作り出す力が含まれる。このパターン発見能力は進化的には古くおそらく全ての霊長類が共通して持っているという。子どもはこの能力を使い言語の文法的・抽象的な部分を習得する。

例えばスキーマの抽象度を上げることで文法を習得する (Guasti 2016 参照)。「he is singing」というスキーマを形成した後、「he is 動作-ing」を形成する。抽象度がさらに上がり、「he is 動詞-ing」になり、「主語・助動詞・動詞ing」になる。これらは特にアナロジーによって達成されるという。例えば習得した用例の中に「he is 動作-ing」と「she is 動作-ing」があれば、heとshe、isとis、そして「動作-ing」と「動詞-ing」という対応関係から類推して「動作-ing」を「動詞-ing」にすることができる。またheとsheから「動作主 is 動作-ing」ともできる。

使用基盤モデルでは、子どもの初期の言語獲得について4つの発達段階が提案されている (Tomasello 2003)。第1段階は1語文 (holophrase) 段階で年齢は12ヵ月である。例えばRockinの1単語で、「椅子を揺らしてもらいたい」という文の内容を表現する。

第2段階は18ヵ月で語結合 (word combination)・軸語スキーマ (pivot schema)

の段階である。2語を組み合わせて、例えば「テーブルの上にボール」がある状況で ball table と発話する。しかし、この段階の子どもはより生産的な発話をする。それが軸語スキーマで、これはある一定の語を「軸」にして他の語と組み合わせる手段である。例えば、More を軸にして More milk や More grapes と発話する。これは「More 変数 X」という単純なスキーマであるが、X という変数スロットを作成している点で単なる語の組合せよりは抽象度が高い。他にも「where's X (Xはどこ)」や「I X (私は X)」などがある。しかしこれらの発話は文法規則に従っているわけではない。

第3段階は項目依拠構文 (item-based construction) の段階で24ヵ月の子どもに見られる。文法的な要素がこの構文には含まれる点で軸語スキーマよりは抽象度が高いと言えるが、これらの要素は全ての使用される動詞に含まれるわけではなく動詞ごとに固有であるという。つまり、使用パターンが動詞ごとに異なる。例えば、cut は「Cut __」という構文パターンしか使用されないが、draw は「Draw __」, 「Draw __ on __」, 「Draw __ for __」や「__ draw on __」の複数のパターンで使用される。これらの例は、動詞がそれぞれ他とは違う独自のパターン（島）を持っていることから、項目依拠構文が動詞ごとに発達するという**動詞の島仮説 (verb island hypothesis)**を支持する根拠になっている。

第4段階は抽象的構文 (abstract syntactic construction) の段階で年齢は36ヵ月である。アナロジーなどのパターン発見能力を使い、項目依拠構文に見られる共通パターンを見出すなどして文法規則の一般化をしていく。そして大人が話すような抽象度の高い構造の構文を使用するようになる。例として他動詞構文がある。この構文は「主語＋他動詞＋目的語」というパターンで、項目依拠構文のように特定の動詞に限定される verb-specific (動詞特定の)ではなく、一般化された抽象度の高い他動詞という要素で構成されており、verb-general (動詞一般的)である。子どもはこの構文に異なる（他）動詞を当てはめて他動詞文を作り出すことができるようになる。

(関田 誠)